大鰐の過去と未来

青森県

大鰐町
おおわにまち

▼茶臼山公園の眼下に広がる町並み

大鰐町の概要

本州最北端、青森県の津軽地方南端に位置する大鰐町は、約10、000人が暮らす小さな町です。この少々不思議な地名の由来には諸説ありますが、大昔に大きな阿弥陀如来坐像があったことから「大阿弥陀」と呼ばれていたものが徐々に「大阿弥」→「大阿尓（オオアニ）」と変形し、やがて鰐が仏教の守護神であることと結びつき、「大鰐」と呼ばれるようになった、とも言われています。こうした由来からも分かるとおり、大鰐町は近隣地域の中でも仏教との縁が深い町で、国の重要文化財にも指定された阿弥陀如来坐像が現在でも祀られています。

冬にはたくさんの雪が降り積もる寒冷地帯であり、それが影響して現在でもレジャーや競技としてのスキーが盛んに行われています。もちろん、このようなスキー文化は自然に生まれたわけではありません。その歴史は大正時代にまで遡ります。当時の大鰐郵便局長であった原子保雄氏が「若者のストレス発散、そして大鰐の名物とするため」スキーを町に広めようと考え、大鰐出身の軍人油川貞策（あぶらかわていさく）氏に協力を依頼します。初めは「大鰐は熱がない」と難色を示していた油川氏ですが、最後は原子氏が参加者とスキー用具を集めることを条件に承諾。こうした働きかけの結果、大正11年に大鰐で初めてスキー講習会が行われ、更に3年後の大正14年には全日本スキー選手権の開催に成功、以後町では現在に至るまで全国規模のスキー大会が度々開催されています。

また、町の特産品としては、４００年以前から栽培され、当時の津軽藩主にも

献上されていた伝統野菜「大鰐温泉もやし」があります。この大鰐温泉もやしは独特の香り、シャキシャキとした歯ごたえが特徴で、その製法については現在でも生産者以外知ることのできない秘匿情報となっています。

そして大鰐温泉もやしは、その名の通り地下より湧き出る大鰐の温泉を利用して栽培されています。

歴史ある温泉街

大鰐町は古くからの温泉街です。その起源は一説には800年以上前とも言われ、当時東国を行脚していた仏僧、円智上人（えんちしょうにん）が大鰐温泉を発見したと伝えられています。大鰐で寺院を建立していた最中、病に倒れた円智上人がある日の夢で「この地に温泉あり。土用丑の日に沐浴すべし」と一人の童子に告げられ、その言葉に従ったところ快復した、とのことです。また、江戸時代に初代津軽藩主となった津軽為信公も、夢のお告げに従い大鰐の温泉で目を洗ったところ、眼病が快癒したとされています。

▲湧き出す温泉水

その後時代が下り、明治28年に奥羽本線陸奥大鰐停車場が開業したことから、町は遠方から来る多くの湯治客で賑わうようになり、大正時代には賑やかな歓楽街が形成されるようになりました。当時の津軽の財閥たちは先を争って大鰐に別荘地を求めたといいます。

現在でも町内には公衆浴場や温泉旅館、また温泉設備を有するホテル等が数多く立ち並び、町外から観光客を呼び寄せる重要な観光資源となっています。とりわけ2005年にオープンした温泉施設「大鰐町地域交流センター鰐ｃｏｍｅ」（以下鰐ｃｏｍｅ）は年間約60万人が訪れる人気スポットであり、町のランドマークとして機能しています。

▲旅館跡地につくられた足湯「ホットパーク加賀助」

財政健全化団体からの脱却

平成以降の大鰐町は非常に厳しい財政状況に陥りました。

町は、過去にスキー場を中心としたリゾート開発を目的として、町の100％出資による（財）大鰐町開発公社（以下開発公社）、そして地元企業とともに大鰐地域総合開発（株）（以下ＯＳＫ）を設立、昭和62年のリゾート法制定を契機に、スキー場開発や温泉施設の整備等を積極的に推進しました。しかしバブルの崩壊に伴い温泉施設は閉鎖、開発公社とＯＳＫには多額の債務が残されました。

債務の大半を損失補償していたことが主因となり、町は大きな将来負担を抱え、平成20年度決算において財政健全化法における健全化判断比率のうち、将来負担比率が早期健全化基準を超えたため、「財政健全化団体」として財政健全化計画を定めました。

▲廃業したリゾート施設

その後、町は早期の健全化に向け、固定資産税の引き上げや家庭ゴミ収集の有料化等による歳入の確保、そして、町長や町職員の給与及び議員報酬等の削減、公債費の抑制、繰上償還の実施、町営施設等管理の見直し、建設事業の抑制等によって歳出の削減を図りました。

これらの取組により、平成26年度決算における健全化判断比率は計画を上回って改善され、今後も早期健全化基準以上とならない見込みとなったため、計画より7年前倒しで財政の早期健全化を完了しました。

▲全国大会なども開催される「大鰐温泉スキー場」は県内トップクラスのスキー場

地元民間団体の取組と町との連携

近年では町の主導によらない地元の民間団体が積極的な活動を行っています。現在鰐ｃｏｍｅの指定管理者である「プロジェクトおおわに事業協同組合」（以下プロジェクトおおわに）もそうした意欲のある団体の一つです。

平成19年、町内の有志が「このふるさとをなんとか元気にしたい！」という思いで民間の町おこしグループ「ＯＨ!!鰐元気隊」を結成、平成21年にはこのＯＨ!!鰐元気隊を母体としたプロジェクトおおわにが鰐ｃｏｍｅの指定管理者となり、現在も同施設の運営にあたっています。プロジェクトおおわにはそれまで赤字続きであった鰐ｃｏｍｅを指定管理初年度から黒字に押し上げ、その後も地元の農産物を販売する「産直の会」を立ち上げ、年間売上が数千万円規模に達するなどの成果を上げています。また、町内の子どもたちのまちづくり意識を促すため「ＯＨ!!鰐元気隊キッズ」を組織、町内の清掃活動や大人たちに混じっての首都圏でのＰＲ活動に参加させるなどの活動も行っています。

こうした様々な実績が認められ、平成25年には地域の発展向上に尽力する団体等を表彰する「地域づくり総務大臣表彰」を、平成28年には個性ある地域の整備・育成に顕著な功績があった団体を表彰する「地域づくり表彰」において国土交通大臣賞をそれぞれ受賞しました。県外の多くのメディアにもその活動内容が取り上げられ、注目を浴びている団体です。

このプロジェクトおおわにと、生産者たちの団体である大鰐温泉もやし組合、そして大鰐町の三者は更なる大鰐の地域振興のため、平成28年9月、「大鰐温泉もやし増産推進委員会」を設立、「大鰐ブランド価値向上プロジェクト事業」を開始しました。国の地方創生事業を活用して、大鰐温泉もやしの増産を軸としたブランド化、町の観光産業の振興と情報発信、次世代の人材育成を実施していく予定です。その皮切りに、県内外・海外に向け大鰐町をＰＲすべく、専門のコンシェルジュが常駐する「大鰐温泉観光案内カウンター」を設置、更に大鰐温泉もやしの地域資源としての貴重さをアピールするため「大鰐温泉もやしフェスタ」を開催、限定販売の大鰐温泉もやしが即完売するなど、幸先の良いスタートを切りました。

▲大鰐温泉を手軽に楽しめる施設「大鰐町地域交流センター鰐 come」

▲町自慢の「大鰐温泉もやし」は古くから伝わる幻の冬野菜

◀フェスタでは寒い中「大鰐温泉もやし」限定販売に長蛇の列

大鰐の未来について

前述の通り大鰐町は財政健全化団体から脱却はしたものの、依然として厳しい財政状況が続くことは変わりません。町としては、持続的かつ安定的な財政運営を図るため、長期的な視点をもった効率的な施策の展開、未利用財産の売却や有効的な活用、地方公営企業等の経営健全化に努めてまいります。また、財政状況を積極的に町民へ周知し、財政運営への理解を深めてもらうことも重要です。その他にも人口減少や高齢化など、困難な課題は山積していますが、町が主体的に実施する施策の他、町民一人一人の力や、各種事業所や団体といった民間の力を結集させ、より一層町を盛り上げていくことが、今後の大鰐の未来にとって大切なことだと考えています。

大鰐町長　山田　年伸

（平成29年4月3日付第2995号）

町村独自のまちづくり施策

新事業の積極的展開に挑む

▼世界有数の透明度を誇る地底湖での特別イベント「龍泉洞ナイトケイブ」

岩手県

岩泉町

いわいずみちょう

岩泉町の概要

岩泉町は、岩手県の沿岸北部に位置し、町の西端は県都である盛岡市と岩手郡に、東端は太平洋に接しています。東西は約51㎞、南北に約41㎞あり、面積は992㎢余りの本州で一番広い町ですが、その総面積の9割以上を山林と原野が占めます。

気候は、町の中心部が盆地型で、西側の山岳地帯は高原型です。東側の沿岸地帯は太平洋側型で、冬の降積雪量は極めて少なく、比較的温暖ですが、夏は「やませ」と呼ばれる冷湿な北東風が入り込み、農作物に影響が出ることがあります。

人口は昭和35年の27、813人をピークに減少を続け、平成27年国勢調査では、速報値で約9、800人でした。高齢化率は4割を超え、少子高齢化が進行しており、定住化対策と少子化対策に取り組んでいます。

震災からの復興への取り組み

東日本大震災による大津波によって、海に面した小本地区を襲い、死者13人(関連死含む)、被害家屋208戸という甚大な被害を被りました。

町では、震災直後から一日も早い復興と住宅再建などに向けて取り組みを続け、25年度に2つの災害公営住宅団地、26年度には集団移転地の宅地造成を完了。28年1月現在では宅地購入者の大部分が住宅建築を開始、または完成させています。

27年10月には、被災した町立保育園に代わる認定こども園を開園し、12月には、集団移転地のほど近くに小本津波防災センターが竣工しました。同センターは3階建てで、役場支所や診療所、三陸鉄道の切符販売所などのほか、一次避難所となる多目的室や調理室などを備えた複合施設です。

▶役場支所、診療所、集会所などの機能を持つ「小本津波防災センター」

津波で被災した小・中学校も28年3月に完成し、震災から5年で被災した全ての公的施設が復旧することになります。

28年秋ごろには、地元の新鮮な魚介類を取り扱う産直施設を地区内にオープンする予定で、小本地区の復興とまちの再生、活性化をこれまで以上に一体的に考えていきます。

豊かな自然を町民ガイドの「おもてなし」で集客につなげる

当町には、高知県龍河洞と山口県秋芳洞とともに日本三大鍾乳洞に数えられる国指定天然記念物「龍泉洞」が町の中心部にあり、年間約20万人の観光客が訪れています。

町西端に広がる県立自然公園早坂高原は、季節ごとにカタクリ、レンゲツツジ、アヤメなどが景色を彩る山野草の宝庫であり、東の海岸線には、三陸海岸でも屈指のビューポイントである熊の鼻と日本国内初の恐竜の化石発見地である茂師海岸が位置しています。

町では、この豊かな自然を誘客につなげようと、24年2月、岩泉観光ガイド協会を設立しました。岩泉観光協会内に事務局を置き、「早坂山野草部会」「山部会」、「海部会」、「まちなか部会」、「龍泉洞部会」で構成されています。各部会の活動内容を紹介いたします。

【早坂山野草部会】

盛岡市との境界に位置する早坂高原には、セラピーロードとして認定されている約2㎞の散策路があります。ウッドチップを敷き詰めたこの道は足に負担が掛かりにくく、森林浴と山野草を楽しみながらの散策に最適です。季節と散策希望時間からガイドが最適なコースを選んで案内します。

【山部会】

町のシンボル「宇霊羅山（うれいらさん）」、シラカバが広がる「毛無森（けなしもり）」、短角牛の放牧風景に出会える「安家森（あっかもり）」の3つのコースがあります。緩やかなペースでの散策で、山の素晴らしさを満喫できます。

【海部会】

小本地区では、地域の活性化を目的に設置された小本地域振興協議会が中心となり、22年夏から、漁船に乗って同地区を海から眺める「モシ竜ロマン・クルーズ」に取り組んでいます。

震災の大津波で小本地区も甚大な被害を受けたことから事業は一時中断しましたが、24年2月からガイド協会の海部会として再開しました。県外の団体客や県内の学校の防災学習としての申し込みも多数あり、今後の集客が期待されています。

また、震災を語り継ぎ、防災意識の向上を図るため、ガイドの案内で津波被災地の現状と過去の津波の歴史などを見て歩く「被災地ガイド」も受け入れています。

◀観光ガイド協会海部会の「モシ竜ロマン・クルーズ」

風光明媚な海岸線は、三陸復興国立公園の一部であるとともに、25年9月、日本ジオパークに認定された「三陸ジオパーク」の一部でもあることから、ジオ関連のガイドとしての需要も高まっています。

【まちなか部会】

町の中心街「うれいら商店街」では、昔ながらのたたずまいを残す街並みと造り酒屋、地元の工芸家の作品を集めた店や伝統工芸を展示した蔵、カッパの伝説を持つ清らかな川などを案内します。

▶震災で被災した小本地区に伝わる郷土芸能「中野七頭舞」

【龍泉洞部会】

26年度に新設した部会です。三陸ジオパークのジオポイントでもある龍泉洞の成り立ちや洞内に生息するコウモリなどを解説しながら案内します。

今後の課題は人材育成とニーズの多様化への対応

同協会では、設立以来、4年間で述べ5千人近くの観光客を受け入れてきました。現在、およそ50人の町民がガイドとして登録しています。

しかし、登録ガイドはいつでも待機していて動ける状態という訳ではなく、修学旅行など大人数の団体客の申し込みを受けた際に必要な人数が揃うかという心配があります。この問題を解決するために、新たな人材の確保、育成が課題ですが、町民の高齢化が進む中、難しい状況にあります。三陸ジオパーク認定や、環境省の整備する長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」の開通に伴い、ガイドに対する依頼内容は年々多様化しています。

今後は、多様化するニーズに対応するため、複数の部会に亘って活動できるガイドを増員し、近隣市町村のガイド団体などと相互に協力し連携を深めることで、地域への誘客と受入態勢の充実を図る考えです。

併せて、ツアー全行程を通してのガイドや龍泉洞水源地帯を中心としたジオツアーのガイドを基にした滞在型のコースを本格的に造成、運営するためのガイド養成に取り組む予定です。

▶新たな特産品「岩泉ヨーグルト」「岩泉のむヨーグルト」と「岩泉ヨーグルトドレッシング」

新たな特産品「岩泉ヨーグルト」と6次産業化

岩泉町の特産品といえば、最近では、岩泉乳業株式会社（山下欽也代表取締役社長）の「岩泉ヨーグルト」が挙げられます。

このヨーグルトは、なめらかな口当たりと弾力、まろやかな甘さが特徴的で、国際的な食品の品質品評機関であるモンドセレクションでは、23年から5年連続で金賞を受賞しており、25年には加糖ヨーグルト、27年にはプレーンヨーグルトが国際最高品質賞を受賞しています。

一時は、全国からの注文に生産が追い付かず、常時品薄状態が続きましたが、27年3月に、第3工場を増設したことで、ハードヨーグルトは日量9トン、ドリンクヨーグルトは日量4トンの生産体制が整いました。同社では、「今まで応援してくれた町民の皆さんへ感謝の気持ちを届けたい」と、同年6月に「岩泉ヨーグルト工場まつり」を開催。県内のラジオ番組の収録と連携したこのまつりには町外からも多くの人が訪れ、町内ににぎわいをもたらしました。

しかし、同社の経営が波に乗るまでの

道のりは、決して順調ではありませんでした。岩泉乳業は、16年に、生産者自らが付加価値の高い製品を製造販売する、いわゆる6次産業化を目的に、町の第三セクターとして設立し、18年1月から操業を開始しました。当初は牛乳を主力商品としていましたが、消費低迷や大手との競合から販売の低迷が続いた結果、5年連続で赤字決算となり、経営は困窮を極めました。

この状況を打破するため、20年度から、主力製品を、牛乳から発酵乳製品に転換。地域の高品質原料乳の素材を生かし、独自の製法で発酵させることで、ハードヨーグルトには独特のもっちりとした食感を、ドリンクヨーグルトには濃厚なコクを生み出しました。この自信作を携えて、町外や県外で、試食、試飲会を開催してのヨーグルト営業を重点的に行った結果、販売店舗数を拡大させることができました。

併せてこのころ、「同社製品のおいしさと品質の良さを応援したい」という町内の消費者を中心にした「乳業応援隊」が発足し、町内外の親戚や知人に贈るなどの活動をボランティアで展開。おいしさを味わった人たちから口コミで人気に火がつき、この年のヨーグルトの売上高は1年間に約5倍と爆発的に伸びました。

ヨーグルトはその後も順調に売り上げを伸ばし、今では全国からの注文が相次ぐ人気商品となりました。23年度から単年度決算の黒字化を果たし、一時は3億5千万にまで膨れた累積赤字を27年上半期で解消するまでに成長しました。

25年には「岩泉ヨーグルトドレッシング」を発売。味は、プレーン、トマト、ハニーマスタードの他、当町が日本一の生産量を誇る畑わさびを使った「わさび風味」の4種類で、こちらも好調な売れ行きを見せています。同社では、今後も地元の特産品を使ったドレッシングを開発することで、6次産業化を推し進めていきたいと考えています。

▶町民への感謝を込めて開催した「岩泉ヨーグルトまつり」にて商品を無料配布。

三セクのホールディングス化で更なる地域振興を狙う

28年1月、町は、岩泉乳業をはじめとする第三セクター4社を子会社とする持株会社「岩泉ホールディングス株式会社」を設立しました。地域経済を発展させ、雇用の創出と6次産業化を推進することが狙いです。

今回ホールディングス化したのは岩泉乳業のほか、特産品製造販売を主に行う「岩泉産業開発」、菌床しいたけの製造販売を手掛ける「岩泉きのこ産業」、龍泉洞温泉ホテルなどを経営する「岩泉総合観光」の4社です。

岩泉ホールディングスは4社の株式を移転し、町が90％以上の株を保有します。子会社4社は従来どおり各事業を実施しますが、ホールディングス化により各社の総務、管理部門がまとまり、原材料調達や運送などの物流が改善される見込みです。各社の特長を生かした新商品の開発や新規事業にも取り組む予定です。

◀更なる地域振興の手段として第三セクター4社をホールディングス化しました。

岩泉町長　中居　健一

（平成28年4月4日付第2955号）

町村独自のまちづくり施策

やさしさと活気の調和した 夢あふれるまち〝おうら〟を目指して

群馬県

邑楽町

おうらまち

▼役場前の水辺で休む白鳥たち

端には毎年白鳥が飛来する多々良沼があります。また、町のほぼ中心には役場や町立図書館をはじめとする公共施設が配置され、自然豊かな田園地帯と、住宅地などの市街地が、程よいバランスで調和した景観を形成しています。

交通は、隣接市町を経由し東武鉄道や東北自動車道、及び首都圏中央連絡自動車道（圏央道）などの交通網で首都圏とつながっています。そのため首都圏へのアクセスも良く、通勤や通学も可能な位

▲白菜の収穫の様子

邑楽町の概要

群馬県は、ご当地かるたの上毛かるたでは「つる舞う形の群馬県」と読まれており、邑楽町はその「つる」の目の部分に位置します。都心から北に約70㎞の距離にあり、東西約6㎞、南北約7.7㎞で面積は31・11㎢を有し、利根川と渡良瀬川に挟まれた平坦地です。

町内には平地林が多く点在し、町の東

置であり、物流にも適した場所に位置しています。

主な産業として、工業については隣接する市町に大きな自動車会社があることから、町内にも自動車関連の工場があり、県内工業出荷額での町村第2位（平成26年群馬県工業統計調査より）を支える主要産業のひとつです。農業については、この地域は古くから米麦が中心の二毛作を行っており、近年では転作としてそばの栽培が多く見られるようになってきました。また、野菜の生産にも力を入れており、中でも特産の白菜を「邑美人（むらびじん）」というブランドとして売り出しています。TVや新聞などの多くのメディアに取り上げられるなど、大変好評をいただいています。

▲ブランド白菜「邑美人」

人口の推移と子育て支援の取組

邑楽町の人口は、平成12年の27、512人をピークに、それ以降は減少に転じています。平成27年には1、086人減少して26、426人、国立社会保障人口問題研究所の推計によると、平成52年には、約20、500人と試算されており、平成12年と比較すると24％も減少してしまうという計算です。

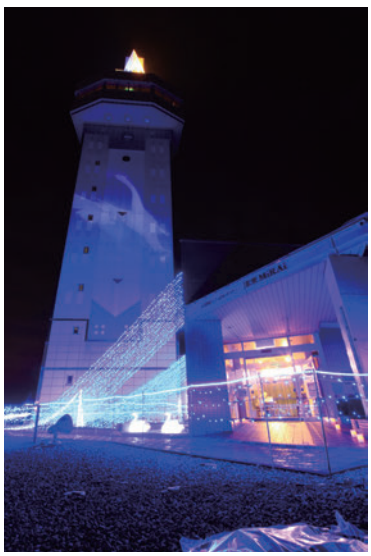
そこで町では「まち・ひと・しごと創生法」に基づき、平成27年に「邑楽町人口ビジョン・総合戦略」を策定しました。この戦略の中には、人口減少を何とか食い止めようと、子育て、雇用、まちづくりなど、まさに「まち・ひと・しごと」に必要な内容が詰まっています。中でも最重点施策として、総合計画にも掲げている「子どもを産み育てやすい環境」の整備を推進しています。具体的には、出産祝い金の給付制度の拡充や、多子世帯の保育料等に係る負担の軽減、また、子にかかる医療費負担の軽減を図りました。

▲子どもたちは町の宝物です

やはり人口の増加のためには、子どもたちの元気な声がたくさん聞こえてくることが一番だと考えます。そのために、子育てをしやすい環境を作り、子育て世代の負担を少しでも軽減できるような取組に力を入れています。

シンボルタワー「未来MiRAi」の活用について

役場庁舎の北側には高さおよそ60mの高い塔がそびえ立っています。これは「ふるさと創生事業」を活用して、平成5年に完成したシンボルタワー「未来　MiRAi」です。町のランドマークであり、その文字通り町のシンボルとなっています。このタワーは地上約40mに展望室があり、上毛3山（赤城山・榛名山・妙義山）をはじめ、浅間山や男体山、さらには筑波山など、関東の名だたる名山を見渡すことができます。また、最近では冬場の空気が澄んでいるときには、東京スカイツリーを肉眼で確認できることもあります。


◀光をまとい幻想的な姿を見せるシンボルタワー

しかし、このシンボルタワーは展望台としての役割しか果たせていなかったのが現状で、観光資源や、人が集える場としてはもうひとつ「何か」が足りませんでした。そこで、3年前から冬期限定でイルミネーションイベント「光のページェント　HiKARi MiRAi」を開催しています。これは、タワーの周りをイルミネーションで飾りつけるとともに、おうら中央多目的広場の芝生にイルミネーションによる巨大地上絵を描き、タワーの展望室から眺めてもらうというものです。あわせてイベント期間中にはタワー内でコンサートを開催するなど、イルミネーションを眺めながら幻想的な世界の中で音楽を楽しめるイベントに

▲広場を彩るイルミネーションとシンボルタワー

日の出を見ることができます。年の初めの大きな太陽が顔を出した時には展望室中に「おぉ～」という歓声が響き渡ります。

地域活性化に向けた地産地消の取組

町のランドマークシンボルタワーの足元には「あいあいセンター」があります。これは、毎週水・土・日曜日の限定営業ですが、町内の農産物や加工食品を取り扱った直売所で、営業時間中はいつも賑わっており、その季節ごとの人気の商品は早いうちに売り切れてしまうこともあるほどです。

冒頭の概要でも触れましたが、邑楽町の農業は昔から米麦が中心で、転作としてそばの栽培も見られます。そのため、この地域では古くから粉食文化が根付いており、そばやうどんなどの粉を使った粉食文化が栄えてきました。その文化を広める意味もこめて、土・日曜日限定でセンター内に「そば食堂」を営業しています。こちらもとても人気があり、営業時間中は行列ができるほどです。

また、農産物等の地産地消の促進を図るため、今年の3月からランチ提供型の「農村レストラン」を水曜日限定でオープンしました。町内産の安全安心な野菜を中心としたランチメニューを、週替わりで2種類ずつ提供し、各メディアにも取り上げられるなど、開店直後から多くのお客様でいつも賑わっています。また、野菜だけでなく、お米や豚肉も町内産を使用し、他の食材のほとんどを群馬県内産にこだわって提供しています。おしゃれな料理というよりも、どこか懐かしい家庭の味が味わえるというところが人気の秘密なのだと思います。

▲農村レストランを特集した町広報紙

白鳥が飛来するまち「おうら」

地域の活性化にはもうひとつ主役がいます。こちらも概要で少し触れましたが、町の東端に位置する多々良沼とそれに隣接するガバ沼に、毎年シベリアから飛来する「白鳥」です。初めてやってきたのは昭和53年でした。それ以降、毎年邑楽町に訪れるようになり、今では観光ツアーが組まれるなど町の人気スポットになっています。最近では100羽を超える飛来数を確認できるようになり、見学に来る多くのお客様やカメラマンの目を楽しませてくれています。

この陰には「白鳥を愛する会」の皆さんによる協力が欠かせないものとなっています。沼周辺の環境整備や白鳥の世話、観光客の対応などを行っていただき、町の観光PRのためにご協力をいただいています。また、毎年1月の最終日曜日には会の主催で「白鳥まつり」が開

▲毎年多々良沼に訪れる冬の使者たち

なっています。これらのイベントの効果もあって、タワーの来場者数は年々増加傾向にあります。

シンボルタワーの活用についてもう少しお話したいと思います。毎年夏に開催している町の最大のイベント「おうら祭り」では、およそ8、000発の迫力ある打ち上げ花火が目玉となっています。事前応募いただいた中から抽選になってしまいますが、この打ち上げ花火をタワーの展望室で真横から鑑賞できるという、一夜限りのプレミアムな時間を過ごすことができる企画も用意しており、皆さまに大変好評をいただいています。また、元旦にも展望室を開放しており、初

催されています。毎年1、000人を超えるお客様にご来場いただき、白鳥たちの優雅な姿を楽しんでいただいています。また、役場庁舎のあるおうら中央公園内にも水辺があり、そこにも白鳥が羽を休めに来ることがあります。役場庁舎から白鳥が間近に見られるという環境は、県内で唯一といってもいいでしょう。公園の利用者はもちろん、役場に来庁されたお客様の目も楽しませてくれています。

中央公民館の建設について

現在、邑楽町では役場庁舎の西側で、中央公民館の建設が進んでいます。昨年の12月から工事に着手し、来年の4月末に完成予定です。完成後備品搬入や音響の調整などを経て平成30年9月にはオープンできるよう、鋭意準備を進めています。

邑楽町はこれまでも社会教育の活発な町として知られてきましたが、残念ながら町民の皆さんが一堂に会してイベントを行ったり、芸術文化に親しめたりするような施設がなかったため、特に、中央公民館に備えられるホールには多くの期待が寄せられています。

この中央公民館ホールは、約350席の電動可動席と約140席分の昇降床を備え、少人数のイベントから約500名の催しまで、様々な利用形態での活用が可能となっています。また、舞台から客席、バックヤードの楽屋まで含めて全てフラットな空間となっており、足が不自由なお年寄りや車いすをご利用の方など、どなたでも出演や鑑賞がしやすいように配慮されています。また、県内でも数少ない難聴者支援システムも備えていることから、町内にとどまらず、広域の福祉イベント等での活用を期待しています。

このホールは、日常的な使い勝手を優先して、約500席の中規模ホールとしたため、著名なアーティストや大規模なクラシックの公演などには向きませんが、その分町民の皆さんや近隣のアーティストの皆さんが気持ちよく発表できる素晴らしいホールになると思います。

▲来年のオープンに向けて建設中の中央公民館

▲建設中の中央公民館の完成予想図

町では、この中央公民館を使って全国に発信ができるよう、町民の皆さんの自主的な活動を育てるため、音楽、ダンス、演劇の3部門を柱として「中央公民館開館準備事業」に取り組んでいます。既に30名を超える町民吹奏楽団が活動を開始し、町民劇団も活動を開始しました。県内でも珍しい1対1のダンスバトル大会は、遠く宮城県仙台市や長野県松本市からの参加者も含め100人以上が集まり、注目を集めています。これからも、こうした「邑楽町ならでは」の特色ある文化活動を育て、「文化と教育の町おうら」を推進していきたいと考えています。

町制施行50周年に向けて

邑楽町は来年、町制施行50周年を迎えます。

町制施行当時、人口は1万5、000人、世帯数は3、100世帯ほどでしたが、およそ半世紀という時間を経て、現在人口は約2万7、000人、世帯数は約1万世帯となりました。しかし、先述しましたが決して全てが順調に伸びているわけではなく、全国的な少子高齢化は邑楽町でもさまざまな課題をもたらしています。

課題解決に向けて、これまでの取組を継続、推進していくのはもちろんですが、これまで以上に町民の皆さんと協働のまちづくりを進め、町の魅力をさらに高め、町に暮らす誰もが未来に向かって夢と希望が持てる「やさしさと活気の調和した 夢あふれるまち〝おうら〟」を町の将来像として、次の50年へ向けたまちづくりのスタートの年にしたいと思います。

邑楽町長　金子　正一

（平成29年10月30日付第3019号）

みどりせせらぎ風の音 Tokyo檜原村

東京都

檜原村

ひのはらむら

▼払沢の滝

檜原村の概要

山並みから始まる小さな小さな流れは、やがて透き通ったせせらぎとなり、ヤマメやカジカを育み、初夏にはカジカガエルが鳴き競い、下水道が整備された沢筋では蛍が復活し乱舞する『自然豊かな村』。

森をぬける風は訪れる人びとの心を爽やかにし、めぐらす山並みは、八王子市・相模原市・上野原市・奥多摩町そしてあきる野市に接している。

村の中央には1、000m級の浅間尾根が東西に横たわり、南谷と北谷に二分し、ふもとを流れる南・北秋川は西から東に流れ、村の東で合流して秋川となる。

集落は清流沿いに点在する渓谷型の山村で、総面積105・41㎢、その93%が山林であり、そのほとんどが秩父多摩甲斐国立公園に属している。世界有数の大都市東京で、島嶼を除いて唯一の村であり、明治22年の町村制施行以来、一度も合併を経験していない、『首都東京で輝く村』それが檜原村です。

都心から高速道路を使って1時間程度の距離にありながら、豊かな自然の宝庫となっており、奥秋川の清流と奥深い山々は、多くの動植物を育み、日本の滝100選の払沢の滝、東京都天然記念物の神戸岩など、有名な観光スポットもあり、水と緑の大自然に恵まれた『首都東京のオアシスの村』でもあります。

檜原村では、戦争による疎開等によりピーク時には7、100人程度の人口でしたが、現在では、2、500人を下回り、3分の1程度まで減少しています。また、65歳以上の高齢者の人口比率は40％を超え、過疎と少子高齢化への対策が最大の課題となっています。そのような中、「森と清流を蘇らせ未来に誇れる村づくり」を基本理念に、

○人々が住みたくなる村づくり
○健康管理と福祉の充実で元気な村づくり
○森や水と調和した産業振興の村づくり
○心豊かな村民を育む村づくり
○参加と交流の村づくり

を柱として、小規模自治体ゆえの小回りが利く行政を目指し、誕生から高校卒業までの子育て支援対策、デマンドバスの運行、福祉モノレールの設置、小中学校の木質化、特産品のじゃがいものブランド化などきめ細かい行政を行っています。

また、生物が生きていくうえで欠かせない酸素と水を供給していく森林を守り続けながら、それを資源として活用し雇用の場となるよう究極の循環型社会を目指して各種事業を行っています。

見渡せば山林、だからこそ木や山を使う
―木使いは気遣いから―

檜原村のかつての主産業は林業でした。しかし、石油の使用による燃料革命や、安い外国産材の輸入により国産材は敬遠され、伐採・搬出しても赤字となるなど林業は衰退してしまいました。

そのような中、森林の持つ役割も経済的な価値より環境面での役割が重視されるようになりました。

そこで、見渡せば山林、間伐をしてもその場に棄てられたように置いていかれる木材、ただの山林を何とか活かしていきたいと考えました。

○小中学校の教室の木質化

人口減少が続く当村では、小学校8校、中学校3校を統合し、それぞれ1校となっていますが、平成15年度から教室内の壁、天井、床に檜原産材の杉、檜を貼る木質化工事を進め、平成27年度には全教室の木質化が完了しました。

木の持つ調湿機能と、檜の殺菌効果等によりインフルエンザの蔓延を防ぎ、木の持つ温かさと癒し効果により心身の安定した学校生活が送れています。このことにより、中学校では9年間学級閉鎖がありません。

○オール木造の図書館

平成19年4月に開館した村立図書館は、オール木造です。一部には樹齢100年以上の村有林を伐採して柱として使用、床暖房も完備し、裸足で木に親しめる施設であり、図書館としての利用のほか、村内を訪れた方々への木材活用のPR施設となっています。

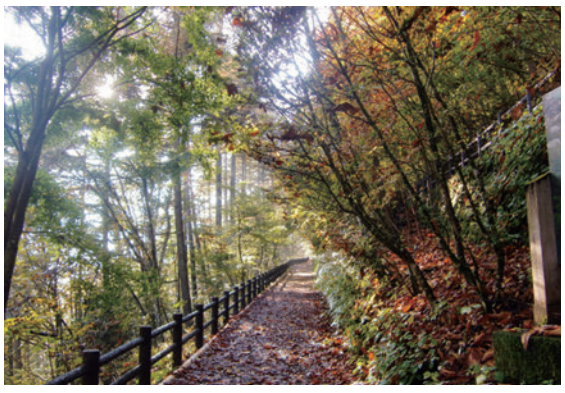
▲オール木造の図書館

○薪ボイラーの設置と薪の活用

薪燃料製造施設を設置し、間伐材の積極的活用と、檜原温泉センターに補助燃料として、薪ボイラーを設置し地球温暖化対策を図っています。

○森林セラピーロードの認定

山岳公園として東京都から指定管理者制度により管理運営を委託されている都民の森「大滝の路」が、森林の持つ癒し効果を活用する森林セラピーロードとして平成19年3月にセラピーロード審査委員会より認定を受けました。ウッドチップを敷き詰めた散策道は訪れる人々に好評を得ています。



▲セラピーロード

○中央区の森やもみじの里

村内でも最も山間地に位置する数馬地区には、東京都中央区の資金援助により山林再生を行っている「中央区の森」があり、地元NPO法人と都市住民により協働で山林の管理が行われています。また、人里（へんぼり）地区では地域の山林に手を入れ、もみじの植栽、散策道の整備を有志で行い、次世代のための名所作りを行っています。

このように、棄てればゴミ、活かせば

資源。ただの山も手を入れることや手入れする方法を考えれば蘇ってきます。

▲中央区の森の看板

じゃがいもがある、それなら使おう

檜原村の特産といえば、急峻な土地で栽培されているじゃがいもが人気です。しかし、ほとんどが自家消費か村内の直売所に少し並ぶ程度。そこで、特産品としてのブランド化と付加価値を持った商品開発が必要と考えました。

○じゃがいも焼酎の販売

以前からじゃがいもの味の良さは評判でしたが、これを使った新たな特産品をと様々な検討を行った結果、他で作っているところが少ない焼酎にたどり着きました。村内での製造を検討しましたが、酒税法等の関係で北海道の酒造会社へ委託、檜原村から北海道へ渡ったじゃがいもが焼酎となって戻り、平成15年5月に2、600本を初めて販売したところわずか3週間で売り切れました。

▲じゃがいも焼酎

○「ひのじゃがくん」を活用したじゃがいものブランド化

村では、マスコットキャラクターとして、じゃがいもをかたどった「ひのじゃがくん」を平成17年度に商標登録し、じゃがいものブランド化を計っています。ピンバッチ、着ぐるみを作製し、ゆるキャラグランプリ等にも積極的に参加しています。

「あるから使う」このことにより、じゃがいもを使ったクッキー、また、数件の飲食店が、檜原村の固有のじゃがいも「おいねつるいも」を使った「おいねめし」を提供するなど特産品の開発に対する熱意も出てきました。

▲ひのじゃがくんクッキー

都会に比べて不便、だけど住み続けている人はいる

檜原村の高齢者比率は40％を超え、空き家も目立ちます。檜原村では交通の主流として牛馬が行き来していた頃は、尾根筋の道が生活道として利用されていました。そのような中で、車道から30分～1時間程度歩いていかなければならない家がありました。そこに道路を作るには、莫大な経費も年月もかかってしまいます。都会と比べたら不便な場所。でも、そこが安住の地なのです。

また、新たに住んでいただくことも大切ですが、住み続けていただいている方、子育て（人育て）している方も大切です。

◀村のマスコットキャラクター「ひのじゃがくん」

○道路建設に代わる福祉モノレールの設置

コスト、工期から道路建設をあきらめざるを得なかった地区も、発想の転換で、みかん畑やわさび田での出荷等に使われるモノレールを基本に、乗用タイプのモノレールを使用することで、道路で

▲福祉モノレール

あれば数年かかるものを単年度で供用開始し、利用する方々からは好評を頂いています。

○デマンドバス「やまびこ」の運行

路線バスのバス停から、30分も歩かなければならない方がいるのも事実です。路線バスと連絡して走らせるデマンドバスを運行しています。

○住宅用火災警報器の全戸設置と振り込め詐欺防止機能付き電話機設置

東京都の火災予防条例で既存住宅への火災警報器の設置が義務付けられたことにより平成18年度から20年度にかけて村内の既存住宅への住宅用火災警報器設置補助事業を実施。平成20年10月に100%設置を達成しました。平成27年度からは火災警報器の点検、交換事業も行っています。また、振り込め詐欺被害を防止するために振り込め詐欺防止機能付き電話機を希望する世帯に設置する事業を実施しています。

▲デマンドバス「やまびこ」

○誕生（妊娠）から高校卒業までの子育て支援対策

村だからこそできる子育て（人育て）、支援として、妊娠時の検診から、出生祝金、保育料、給食費、小、中、高校生等への通学補助、修学旅行、遠足等への補助、中学生海外派遣等の充実した助成制度を実施しています。

村を活性化するため何かをやりたい ―ものづくりチャレンジ事業―

○ものづくりチャレンジ事業

愛する檜原村のため、「檜原村をもっと多くの人にPRしたい」、「新たな特産品を開発したい」、「イベントをやりたい」等々という方々のため、使い勝手の良い補助金制度を創設しました。

○地域おこし協力隊の活用

村の課題解決のために平成27年9月に2名の地域おこし協力隊員を採用し、喫緊の課題である空家対策、買物支援等について新たな視点で対策方法を構築しています。

○第3セクターの設立（ミニスーパーの運営）

過疎化が進む当村では、村内の商店でも店をたたむところが目立ち始め、高齢者の買物に支障が出始めています。また、雇用の創出も必要です。このため、行政ではできない部分を補完し、地域の活力を生み出すため、第3セクターによるミニスーパーの運営を平成28年7月から実施する予定です。

できない理由を探すのではなく、できる可能性を探す

檜原村のような小さい自治体では、住民の方とのかかわりは非常に密接となります。困っているから村に相談、連絡をされる方がほとんどです。

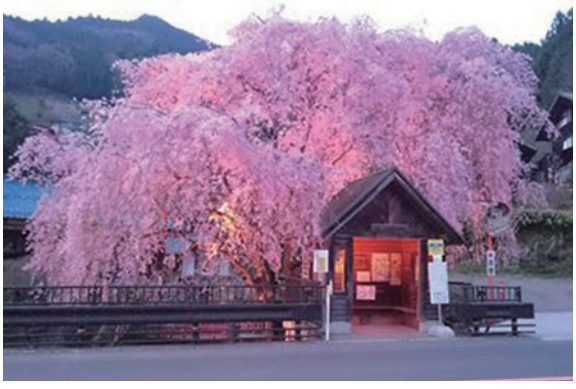
住民ニーズを敏感に取り入れ、「できない理由を探すのではなく、できる可能性を探す」という理念をもって取り組んできた事業の一部を紹介させていただきました。

人口は少なくても首都の宝石として輝く村を目指し、今後は住民福祉の更なる向上を図りつつ、豊富な自然を生かしたエコツーリズムにより檜原村を更に発展させていきたいと考えています。

新緑に染まる山々、真夏の清流での川遊び、もの寂しさを感じる紅葉の滝、水墨画のような雪景色、四季折々の風景が楽しめる檜原村へぜひ一度足をお運びください。

檜原村長　坂本　義次

（平成28年6月20日付第2963号）



▲人里（へんぼり）の桜

「森といで湯と田園文化の里」づくり

岡山県 鏡野町
かがみのちょう

▼緑あふれる豊かな自然が魅力の鏡野町

鏡野町の概要

平成17年3月1日に鏡野町・奥津町・上齋原村・富村が合併して誕生した「鏡野町」は岡山県の最北部にあり、北は鳥取県に、南東は津山市、西は真庭市に接し、山陽地方と山陰地方、また、関西圏と広島県の中間で、古くから交通の要衝となっています。

総面積は419・69㎢で岡山県内の町では最大の面積を有しており、そのうち87・3％を森林が占めています。町には豊かな森林を源とする大小の河川が多くあります。なかでも県の三大河川の一つで町の中央部を流れる吉井川は、天然記念物の「匼穴」で有名な奥津渓など、風光明媚な渓谷を作り、苫田ダムの建設により誕生した「奥津湖」を経て県南へと流れて飲料水、農業用水等に利用されるなど、県の重要な水源となっています。

農地は南部を中心に約1、300haあり、圃場整備のなされた水田では、主に水稲、ナス、トマト、ブドウなどが栽培されています。また、北部ではリンドウやアルストロメリアなどの花卉類も栽培されています。

町内には、県内最大のスキー場や

多くの温泉、キャンプ場など多種多様な観光施設があり、多くの観光客に利用されています。

また、我が国で初めてウランの露頭が発見された人形峠もあり、ここで採掘されたウランを利用した、我が国唯一のウランガラスを製品化する「妖精の森ガラス美術館」が上齋原地域にあります。

ウランガラスは紫外線があたると黄緑色に発光するため、訪れた人々はその光の美しさに魅了されています。

このように、観光にも力を入れ、多くの交流人口を創出し、地方創生につなげていくことを目指しています。

なお、本町では、平成27年度に第2次総合計画を策定しました。第1次計画から引き続き「交流・連携する里」「安心・安全な里」「子どものきらめく夢・未来を実現する里」の3つを基本理念に、快適で潤いのある生活空間や安心とゆとりを備えた住みやすさ、そして本町の地域らしさを創造し、ときが心地よく流れ、住民一人ひとりがいきいきと輝きながら暮らせる里づくりを進めることとしています。

▶神秘的な蛍光を放つウランガラス

健康をキーワードにまちづくり

本町では、行政評価を活用し、経営方針により、「最重点施策」「重点施策」などを毎年度設定してまちづくりに取り組むこととしています。

その中で、「健康づくりの推進」については、国保被保険者1人当たりの医療費が県内で上位にあることから、平成25年度から最重点施策とし、町民の健康づくりに関する基本理念を定めた「鏡野町健康づくり条例」を制定して各種施策を実施しています。

具体的には、特定健診の受診率向上、町で考案した健康づくり体操の普及、個人ごとに目標を決めて取り組んでいただく「健康チャレンジ90事業」、65歳以上を対象とした肺炎球菌ワクチン接種の補助などを実施してきました。

医療費については、すぐに効果が出て減るものではありませんが、継続して実施し、町民の皆さんの意識改革を図っていくことが重要と考えています。

平成28年度においては、地方創生加速化交付金を活用した「健康の町〝ががみの〟スタイルによる地域活性化プロジェクト」として、健康の町をキーワードに着地型観光（開発）に取り組んでいます。温泉や山歩きトレッキング、野菜の収穫などを体験していただき、「ががみのファン」を増やし、リピーターとなって再度「ががみの」を訪れていただく。町民にも健康への意識を高めていただく。これらによって地域の活性化も図れるというものです。

▶「美人の湯」として有名な奥津温泉では足踏み洗濯の体験も

◀ノルディックウォークで健康増進を

平成29年度も引き続きこれらの事業を実施するとともに、鳥取県との県境を縦走するトレッキングコースの整備、予防接種・各種検診の費用助成の拡充などに取り組む予定です。

地域との連携・協働の推進

本町では、活力ある地域づくりと「新たな支えあい助け合い」の担い手を多数創出して、町民と町の協働によるまちづくりを推進することを目的に「鏡野町未来・希望基金事業」を実施してきました。

具体的には平成22年度から5年間、町民の主体的な地域活動を推進し、公共の領域をともに担い合う「新しい公共」の考え方のもとに、町民が自主・自発的に行う公益的なまちづくり活動に対して、経費の一部を支援するものです。

これは、1億円の基金を財源として、12の公民館単位に組織された「地域づくり協議会」へ対し、経費の一部を支援するもので、平成27年度からは第2期の事業が始まっています。

各地域での健康づくり事業、河川や道路の草刈りや清掃、高齢者の見守り事業など、地元の課題を洗い出し主体的に事業に取り組んでいただいています。

また、公の施設の管理運営においても、住民有志がNPO法人を立ち上げ、指定管理者となっているものもあり、今後も、地域や町民との連携・協働を進めていくこととしています。

なお、平成27年3月1日には、合併10周年を契機に、協働と助け合いのまちづくりを一層推進するため「鏡野町輝くまちづくり条例」を制定しています。

▶草刈りなど町民と町の協働によるまちづくりを推進

地域特産物の開発

本町では、基幹産業である農林業の活性化のため、特産品の開発に取り組んでいます。なかでも平成16年に設立されたNPO法人「てっちりこ」は地元奥津地域で古くから栽培されていたトウガラシを「姫とうがらし」と名付けてドレッシングやしょうゆなどの商品開発に取り組み、食を切り口にした地域おこしに取り組んでいます。作業負担が少なく鳥獣被害に遭いにくい野菜であるため生産しやすく、6次産業化を通じて中山間地域でのビジネスの可能性を切り開くとともに、過疎・高齢化で衰退しつつある農業の活性化にも一役買っています。

しかし、栽培される方の高齢化による生産量の減少、新しい商品の開発や販路の拡大による売上高の確保

▲姫とうがらしを使った辛美人シリーズ

▲鹿肉の缶詰

◀素朴な逸品として人気の「原木なめこ」

が今後の課題となっています。

全国で問題になっている、鳥獣被害の対策のため捕獲したいのししや鹿のジビエの有効活用を図るため、住民有志が弁当の開発（やま弁）や地方創生の交付金も活用して缶詰の開発に取り組むなど各種商品化を図りました。

少しずつ売り上げを増やしているところで、平成28年には「企業組合鏡野やま弁クラブ　ののもん」を設立し、本格的に取り組んでいるところです。

また、上齋原地域では以前から、香りやぬめりの強い「原木なめこ」の栽培を行い、生や缶詰にして販売を行っていましたが、天候に左右されて収穫量が安定しないため、徐々に生産量が減少してきていました。このため町は、上齋原地区で「原木なめこ」の生産を拡大し、雇用や地域の活性化を図ることを目的に、地方創生加速化交付金を活用してなめこを生産する施設を整備し、新しい商品開発やマーケティングにも取り組んでいます。

子育て支援

本町では、少子化対策、定住化の促進を図ることを目的に、子育て支援に積極的に取り組んできました。

合併以前からのチャイルドシート購入助成、平成20年度からのおしめの購入助成、平成22年度からの中学生までの医療費の無料化などを近隣市町村に先駆け実施してきました。また、平成20年度には子育て支援センターを新築し、地域住民により結成されたＮＰＯ法人が指定管理者となり管理運営しています。

▶親子で楽しめる子育て支援センター

このように子育て支援対策に早くから取り組んでいたため、町民や近隣自治体の子育て中の方からは高い評価を得ているところです。

人口減少を食い止めるには、出生数の増加が必要ですが、子育て支援を継続して実施していくことが、少子化対策になるものと考えています。

農林業の振興

農林業については、全国的に担い手不足で、農地や山林の荒廃が問題になっているところです。本町も例外ではありません。

このような中で、農業の振興を図ることを目的に、平成27年度から3年間の事業として、大型農業機械等の購入に購入額の二分の一、最大５００万円の補助を行っています。総額3億8千万円の事業規模となる見込みです。

林業については、通常の間伐促進や林道、作業道の整備を進めていますが、平成28年度に森林（もり）づくりについて基本理念を定め、町、森林組合、森林所有者、事業者及び町民等の責務又は役割を明らかにする、森林づくりに関する施策を総合的かつ計画的に推進することを目的に「鏡野町森林（もり）づくり条例」を制定。林業関係者と意見交換しながら、森林づくりに取り組むこととし、新たな施策を検討しています。

◀豊かな森林の保全を目指す

鏡野町長　山崎　親男

（平成29年4月10日付第２９９６号）

町村独自のまちづくり施策

ふるさとの美しい自然と歴史を受け継ぎ、明るく住みよいまちづくりを

山口県 平生町（ひらおちょう）

▼「大星山サイクルフェスタ in ひらお」のゴール地点（大星山山頂から望む瀬戸内海の島々）

平生町の概要

本町は、本州最西端山口県の東南部、室津半島の西側で瀬戸内海に位置しており、年間を通じて雨の少ない、瀬戸内海性気候の温暖な町です。

この地に人々が住みついたのは縄文時代中期（約4千5百年前）で、町内には、広島県・山口県では最大の前方後円墳や、全国的にも珍しい女王を葬った古墳、瀬戸内地方で最大規模の縄文時代の遺跡も発掘されています。

また、日本の初代天皇とされる「神武天皇」が立ち寄られたという伝説が残る箕山（みやま）や、聖徳太子の御尊父である用明天皇により建立された「神峰山 般若寺（はんにゃじ）」など、歴史上の重要人物にまつわる史跡も数多く残されていることから、古代より、安住の地であったことをうかがい知ることができます。

現在、人口は、約1万2千人。その約4割を高齢者が占め、年少人口は約1割と、全国的にも早いペースで少子高齢化が進んでいます。

一方、健康寿命が山口県内女性第1位、男性第2位（前回は男女とも第1位）、住民アンケートでは、6割以上の人が子育て環境に満足、7割以上の人が住み良さに満足（※）と回答しており、健康で安心して長生きできる町です。（※平成26年まちづくりアンケート結果より）

また、平成24年には、近隣自治体であ

る岩国市に、日本で2番目の軍民共用空港として「岩国錦帯橋空港」が開港しました。本町から東京までの時間距離が、約5時間から約2時間30分に短縮されたことで交通アクセスも大幅に向上、都市部からのさらなる観光需要の高まりや、移住・定住促進も期待されているところです。

このような状況を背景に、全国的な地方創生の動きも相まって、平成27年、「平生町未来戦略」を策定。現在、人口減少を克服するとともに将来にわたって活力ある地域社会を実現するため、様々な取組を進めています。

さて、本町には、昭和60年に制定した、「平生町民憲章」があります。今回は、この町民憲章に沿って、本町の取組をご紹介します。

平生町民憲章

一　自然を大切にし 環境をととのえ 美しいまちをつくります

本町を訪れる際、まず目に留まるのは山稜に連なる7基の真っ白な風力発電用風車。本町の風土等を活かし、平成16年に1基、平成21年に6基が民間事業者により設置され、町のシンボル的存在となっています。

▲「室津半島」の山稜に連なる風力発電施設

さらに、近年はメガソーラーが設置されるなど、環境負荷の低い再生可能エネルギーの普及促進が進んでいます。

また、昭和50年代初頭から、有機農法等による環境保全型農業を進めてきました。害虫の天敵を導入することで農薬散布を極限まで減らし、アルギット（海草）などの有機肥料を施して育てた安全・安心の「アルギットみかん」は、濃厚な甘みが特徴で、現在も、みかんはもちろん、「アルギットみかん」の100%ジュースなどの加工品とともに町の特産品として愛されています。

このほか、町内産の農海産物などを販売する「ひらお特産品センター」は、平成10年、都市と農村の交流を図り、地域の活性化の拠点とすることを目的に町が建設・運営を始め、平成17年から指定管理者制度を導入、現在は民間事業者が農薬や化学肥料の使用の有無等により野菜に三ツ星制度を導入して、町内産の安全・安心・新鮮な野菜を提供しています。

▲メガソーラー（太陽光発電施設）

◀平生町農産物

一　スポーツに親しみ きまりを守り 健やかなまちをつくります

本町には、半世紀以上にわたり毎年行っているスポーツイベントがあります。「平生町駅伝競走大会」はその一つで、町内の小中学生から地元企業、近年では地域コミュニティ組織での参加もあり、生涯を通じてスポーツに親しむ取組を行っています。

また、過去には「永大産業サッカー部」という当時の日本サッカーリーグ（JSL）、現在のJリーグに相当するサッカーチームが存在しました。昭和47年に創部し、わずか2年でJSLに昇格、翌年には天皇杯サッカー選手権準優勝、昭和52年に廃部という「伝説のサッカーチーム」です。

廃部後は、選手の一部が指導者としてサッカー文化を育み、Jリーガーなど多くの選手を輩出しています。現在は、サッカーを「我がまちスポーツ」として根付かせ、育成することで、地域スポーツの振興と地域交流を推進すべく、プロ

◀プロサッカーチーム「レノファ山口」の選手を講師に迎えたサッカー教室

サッカー選手を招いたサッカー教室などを開催しています。

さらに近年では、本町の地形やインフラを活かした「大星山サイクルフェスタｉｎひらお」や「ＨＩＲＡＯ風緑マラソン」などの、民間主導のスポーツイベントも行われるようになり、スポーツ・ツーリズムによる観光振興の取組も増えています。

▲永大産業サッカー部の偉業について執筆された本

一　思いやりと 感謝の心をもち 温かいまちをつくります

地域では、「おたがいさま」の精神で、多くの町民がボランティア活動や地域活動に参画し、高齢者への支援、子育て支援、学校と連携した教育支援を行っています。

その一例が、「年越しそば配食事業」です。平生町社会福祉協議会を中心に、配食ボランティアを募り、大人のみならず小学校・高等学校の生徒も一緒になって、毎年12月31日にお年寄りの単身世帯に年越しそばを届けています。この活動に携わった小学生の一人は、その後も地域や海外でのボランティア活動を継続、その活動が高く評価され、平成27年に第19回ボランティア・スピリット賞（アワード）（※）を受賞した6団体6名のうちの一人に選ばれました。

一　勤労をとうとび 活力にみちた 豊かなまちをつくります

現在の町の中心部は、江戸時代まで海でした。当時、この地域を治めていた大野毛利氏が行った平生開作により、堤防によって海水が堰き止められ、広大な140haの干拓地（現在の平生町中心部の平生平野）が生まれました。この時、海面よりも低い開作地への海水の侵入を防ぎ雨水を排除するため、当時としては最新技術といわれるオランダ技法を用いて造られた「土手町南蛮桶（なんばんひ）」は、近年の河川改修工事により惜しまれつつ解体されましたが、平成28年には改修後の河川の横に移築復元しました。現在は、町の歴史を後世に伝えるシンボルとして、新たな観光資源となっています。

このような、先人の方々の開拓精神とたゆまぬ努力により築かれた平野部には、通勤・通学に便利なことから住宅地や商業地が密集し、サービス業を中心とする産業が発展しています。

▶移築復元された「土手町南蛮桶」

また、国際貿易港「平生港」があり、工業団地には、木材加工や金属加工などの関連企業が進出しています。

一方、豊かな瀬戸内海に面した本町では古くから漁業が盛んでしたが、戦後の高度経済成長期を経て、過疎化と高齢化による後継者不足により、その伝統の継承が危惧されています。このような状況の中、近年、Ｕターンした若者による水産業の復活に挑む事業者も見られるようになり、ストーリー性のある水産加工品開発や、未利用資源の製品化などにより競争力の高い商品開発が行われています。開発された新商品は、全国各地から寄せられる平生町へのご寄附（ふるさと納税）に対する町からのお礼の品として提供しており、多くの方々に喜ばれています。

また、この瀬戸内海には世界最小のクジラ「スナメリ」が生息し、本町の有人離島「佐合島（さごうじま）」は瀬戸内海国立公園に指定されるなど、美しい海は観光資源としても注目が高まっています。近年、Ｉターン移住者によって起業された、シー

カヤックの体験ツアーや、子どもが生きる術を学ぶ冒険学校なども始まり、新たな観光産業として期待されています。

一　文化を創造し 若い力を育て 伸びゆくまちをつくります

教育分野においては、「子どもは地域の宝」という考えにより、学校・家庭・地域の連携による取組が各地区や団体、学校ＰＴＡなどで行われてきました。平成23年度、これらの団体が連携する「平生町地域協育ネット運営委員会」が発足し、町ぐるみで子どもを見守り育てる取組を推進しています。その主な活動として、地域住民のボランティアによる学校支援活動や、放課後子ども教室、放課後児童クラブの運営などが行われており、この取組が評価され、「平成25年度優れた「地域による学校支援活動」推進にかかる文部科学大臣表彰」を受賞しました。

このように、地域住民との関わりの中で育まれた子どもたちは、この町が「ふるさと」となり、この美しい自然と歴史を受け継ぎ、将来にわたって明るく住みよいまちづくりを担ってくれることと確信しています。

以上、ご紹介した取組を含め、現在、平成24年に制定した「平生町参加と協働のまちづくり条例」に基づき、住民・各種団体・事業者・行政が一丸となって課題を克服しながら邁進しているところです。

おわりに、平成12年に発足した「ひらおファンクラブ」についてご紹介します。この会は、町の情報を広く共有しながら会員相互の交流を図ることで町の発展に寄与することを目的としており、現在約１３０名の会員が全国各地にいらっしゃいます。平成24年度からは、ＳＮＳ（フェイスブック）による情報発信を行っており、この度ご紹介した取組についても詳細に紹介していますので、ぜひご覧ください。そして、平生町のファンになっていただいた際には、

『ぜひ、平生町へおいでませ！』

平生町長　山田　健一

（平成29年8月7日付第３００９号）

※「ボランティア・スピリット賞」とは、米国最大級の金融サービス機関プルデンシャル・ファイナンシャルが95年からアメリカにて開始した青少年を対象としたボランティアを支援する制度です。現在はアメリカ、日本、韓国、台湾、アイルランド、インド、中国、ブラジル、ポーランドで表彰式が開催され、それぞれの国からボランティア大使が選出されています。

▶イタリアの伝統調味料を再現したイワシの魚醤（瀬戸内コラトゥーラ）

▶こだわりの伝統製法で加工された瀬戸内海産のいりこ

◀シーカヤックによるスナメリウォッチングツアー

▲ひらおファンクラブフェイスブックページのカバー画像
https://www.facebook.com/hiraofanclub

▲ひらおファンクラブロゴマーク

▼くらて学園プロモーションビデオにエキストラ参加してくれた皆さん

サブカルチャーの聖地を目指して
廃校を活用した小さな町の大きな挑戦

福岡県
鞍手町
くらてまち

消滅可能性都市福岡県ワースト1位からの脱却

鞍手町は、福岡県北部の町で、福岡、北九州両政令都市の中央に位置する面積35㎢ほどの小さな町です。古くは石炭産業で栄え、一時は人口3万人を超えましたが、昭和30年代後半のエネルギー革命によりすべての炭鉱が閉山。失業や人口流出などで町は大きな痛手を受けました。その打開策として、町は約半世紀をかけ、農業の振興、企業誘致、住宅誘致などを進めてきました。

近年では、九州自動車道鞍手ICの開通など、新たな交通軸を柱としたまちづくりを進めてきましたが、人口減少には歯止めがかからず、直近の国勢調査では1万6千人にまで落ち込んでいます。加えて、平成26年に日本創成会議（座長・増田寛也元総務相）が発表した、消滅可能性都市ワーストランキングでは、福岡県で1位、全国でも30位という、不名誉な

▲平成 23 年に開通した鞍手 IC を手前に上空から見た町並み

結果に。新聞には「女子が消える町」というショッキングな見出しが躍りました。

2つの廃校の活用策を公募 実現可能なアイデアはなし

この状況を打開する取組の一つとして、教育環境の充実を図るため平成27年4月、町内2校の中学校を統合。以前、専門学校として使用されていた校舎などを町が買い取り、改修を加えて新たな中学校を開校しました。新中学校の校舎は、広々とした空間に充実した学習設備、太陽光発電による冷暖房などを完備。また、400mトラックが優に入るグラウンドや専用の野球場、体育館、人工芝のテニスコートなども設営し、生徒達が集中して勉強やスポーツに取り組める教育環境となっています。

▲廃校となった旧鞍手南中学校（現くらて学園）

この統合により、2つの空き校舎ができました。町では、統合の1年前から、今後の活用方法を決めるため、町内の有識者などで組織する「中学校跡地等利用検討委員会」を設置し、協議を進めてきました。この中で、活用方法のアイデアを町内外に募集したところ、企業誘致や図書館整備、高齢者の居住施設建設など26件もの応募がありましたが、運営や財政面の問題から、実現できそうな案は見つかりませんでした。

学校をまるごとスタジオに「くらて学園構想」

廃校から2か月、校舎は窓ガラスが数回壊されるなどのいたずらが続いていました。その対応に苦慮していた町に、平成27年6月中旬、1件の企画が持ち込まれました。旧鞍手南中学校をアニメの聖地にしませんか…。「くらて学園」構想です。

福岡市内で企画会社を営む重松克則さん（山重堂合同会社代表・当時）は、20ページにも及ぶ企画書を携え、熱く語りました。「廃校をまるごと、大きな撮影スタジオにしてみませんか。本物の教室、長い廊下、階段、体育館、屋上など。今、コスプレ撮影で本物の学校が使える場所は全国を探してもほとんどありません。常設スタジオになれば、全国各地から必ず若い子たちが集まってきます。世界的には5兆円規模といわれるオタク産業市場。もし、ここに100人のコスプレイヤーが集まれば、そこにコミュニティが生まれ、評判がツイッターなどSNSでどんどん拡散していきます。コスプレは学園物の漫画やアニメが人気ですから、くらて学園が聖地になれば、クリエーターの注目も集まり、それが新規創業や雇用に、さらには移住・定住の促進にもつながります。」と。

▶重松さんが企画した「くらて学園構想」

「コスプレイヤー」や「カメコ（カメラ小僧）」など、聞き慣れない言葉に徳島眞次町長をはじめ、対応した私たち職員も戸惑いと驚きばかりでしたが、「面白いじゃないか、やってみよう。」という、町長の決断でプレイベントを開催することになりました。

ライフラインが全滅でもイベントに156人が参加

第1回「くらて学園」は、1か月後の平成27年7月26日、日曜日に開催が決定。コスプレと痛車（アニメキャラなどをラッピングをした車）の2つのイベントを同時に実施することになりました。しかし、開催の告知はわずか2週間前。通常では、衣装や道具などを手作りするため、2~3か月前に告知するのが当たり前です。この短い期間で人は集まるのだろうか…。また廃校舎は、電気や水道、トイレ、空調などすべてのライフラインが使えません。不安は募るばかりです。

でも、そんな不安はすぐに払拭されました。当日の早朝、重いキャリーケースを持って受付に列を作る若い女の子たち。みんな電車やバスを乗り継ぎ、地図を片手にくらて学園を目指してきました。

アニメキャラの衣装に、色鮮やかなウィッグ（かつら）、化粧、カラーコンタクトなどなど。着替えを終え更衣室から出てきた彼女たちは、まったくの別人に変身。校舎や体育館、屋上など場所を変え、2人から10数人のグループが専属カメラマンの注文に応えてポーズを取ります。1日で2、3人のキャラクターを演じるコスプレイヤーもいます。すれ違う

▲学園もののキャラクターになりきるコスプレイヤーさんたち

は、くらて学園の取組は、廃校利用や先駆性などがその目的に合致すると考え、「学校まるごとアニメ事業」として応募。11月上旬には、申請した全額の交付が決定しました。

しかし、ここからが大変です。申請したソフト事業、ハード事業ともに、半年後の平成28年3月末までに完了しなければなりません。イベントの開催やプロモーションビデオ、ホームページなどコンテンツの作成を柱とするソフト事業は、重松さんを中心に設立された「くらて学園合同会社（現在は株式会社くらて学園）」に委託することとなりました。

ハード事業では、電気、水道などライフラインの復旧のほか、インキュベーションベース（創業支援室）やトイレ、休憩室、事務室などの改修工事を急ピッチで実施。備品として高精度3Dプリンタや漫画編集用ペンタブレットなどを揃え、クリエーターの受け入れに備えました。

また2月には、平成27年度補正予算として提示された地方創生加速化交付金に「学校まるごとアニメ事業」をさらに進化させた「学校まるごとサブカル事業」として応募。東南アジアを中心としたコスプレイヤーを受け入れるインバウンド事業やオリジナルの漫画を展示する創作漫画図書室の整備等の事業を柱に追加の交付を受けることになりました。

この交付金を活用したハード事業として、図書室や和室、更衣室などを改修。また漫画や写真集などを製本する無線綴じ製本機、3Dスキャナ、レーザーカッターなどの備品を導入しました。

▲おしゃれに改装された創作漫画図書室

校舎改修やコンテンツ作成に地方創生交付金を活用

ちょうどそのタイミングで、内閣府から地方創生交付金（先行型上乗せ交付タイプⅠ）の事業募集がありました。町でたびに礼儀正しくあいさつをくれる参加者たち。みんな笑顔であふれていました。その姿を見たとき、「これはいけるのではないか」と、熱い何かを感じたものです。この日のイベントには、県外を含め、156名が参加。大成功でした。

これを機に、土日の2日間開催やハロウィン、アニメソング、校内お掃除イベントなど、月に一度という継続したプレイベントの開催が始まりました。

創業支援室はシェアルーム仕事の化学反応に期待

平成28年4月には、学校校舎と町が交付金で購入した備品について、くらて学園合同会社に無償貸付する契約を締結。ここから、くらて学園合同会社は、維持管理に必要なすべての経費を負担するなど自走に向けて本格的に取り組み始めました。

また7月末には、インキュベーションベースの利用について、13事業者との間で契約を締結。このインキュベーションベースは、月3千円で、机や椅子、パソコン、会議室などをシェアして使用できることが特徴です。印刷やデザイン、スーツアクターなどの会社のほか、写真や音楽、映像、イラスト、グッズ制作など個人でも利用されています。通常のインキュベーション施設のように利用者が常駐しているわけではありませんが、必要に応じて利用者間で調整して仕事の依頼に応じたり、アイデアを出し合って新しい仕事を創出したりしています。さらなる仕事の化学反応に期待しています。

▲インキュベーションベース利用契約調印式

東南アジア3か国から6名を親善萌え大使に任命

平成29年2月には、加速化交付金のソフト事業として、シンガポールから3名、マレーシアから1名、インドネシア

から2名の合計6名のコスプレイヤーを招請。「くらて学園親善萌え大使」に任命しました。

この事業は、福岡県が運営するポップカルチャー配信サイト「アジアンビート」や㈱日本旅行、シンガポールに拠点を置くイベントサイト「AFA（アニメ・フェスティバル・アジア）」の協力を得て実現したもので、6名の中にはインスタグラムでフォロワー数が13万人を超えるコスプレイヤーもいます。萌え大使は、2泊3日の短い滞在の中、くらて学園で日本の文化やコスプレ撮影を満喫。日本のコスプレイヤーとも親睦を交わしていました。

また3月上旬には、アウトバウンド事業として、シンガポールで「くらて学園コスプレ集会」を開催。くらて学園から

▲萌え大使任命式で

▲シンガポールでのイベントも大成功でした

希望と課題が交錯する中進化を続けるくらて学園

2名のコスプレイヤーとカメラマンが渡星し、萌え大使や現地のアニメ、コスプレの愛好者約400名と交流しました。短期間でしたが、写真撮影会やメイク術の講演など充実した時間を過ごすことができ、「くらて学園」の魅力を十分にアピールできたのではないでしょうか。

くらて学園は、全施設を貸スタジオとして活用できることから、大学の学生募集のコマーシャルやアイドルグループのプロモーション動画、写真集の撮影にも利用されています。また、撮影イベントは学園内に留まらず、町内の花畑や神社、キャンプ場、廃墟（使用していない公共施設を活用）などにもその範囲を広げています。これは、インキュベーションベースを利用する若いカメラマンたちが立ち上げたもので、「くらて学園ぶんこう」として定着してきました。

くらて学園の企画が持ち込まれて、1年9か月が過ぎました。月に一度の定例コスプレイベント（土日の2日間）には、平均200名以上が参加。うち2割以上は県外から訪れています。学園の生徒（会員）数は1、200人を超え、新規の生徒はまだまだ増え続けています。

しかしながら、この「くらて学園構想」が成功したと言えるまでには、越えなければならない壁がまだたくさんあります。安定した収益の確保、人材の育成、施設の維持管理などなど、くらて学園が本当の意味で自立していくためには、多くの課題が残っています。

▲イベントの撮影は、日が暮れるぎりぎりまで続きます

これまで、鞍手町とくらて学園は〝協働〟の立場でこの事業に取り組んできました。今、くらて学園を通じて多くの若い力が結集し、次々と新しい企画にチャレンジしています。町を活性化させようという、スタッフの行動力や熱い思いに負けないように、これからも町はサポートを続けていかなくてはなりません。

くらて学園は、どこまで進化できるのか……。小さな町の大きな挑戦は、まだ始まったばかりです。

鞍手町　地域振興課

（平成29年9月25日付第3014号）

▲廃墟はコスプレイヤーに人気のスポットです

町村の施策事例集 Ⅵ　完全保存版

「魅力ある町村を実現するための様々な取り組み」

平成30年８月発行

編集・発行　全国町村会

〒100-0014　東京都千代田区永田町1-11-35

全国町村会館

全国町村会

町村の施策事例集

VI

完全保存版

移住・定住・交流人口促進、
地域コミュニティ・産官学金労言等との協働

教育・伝統文化・スポーツ、
少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

自然環境対策、災害防災対策・危機管理、
再生可能エネルギー

観光振興、体験型ツーリズム、
イベント（ご当地フェスタ）・環境・遺産（世界・日本）

町村独自のまちづくり施策